

IV 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器類、瓦類、木製品、銅製品、鉄製品、銭貨、石製品などである。瓦の出土量が極めて少ない。

1. 土器・土製品(PL. 16~19, fig. 12~25)

調査区全域から土器類が出土しているが、調査面積に比して出土量はさ程多くはなく、平箱にして約60箱分である。出土総量のうち約3分の2ほどが何らかの遺構に伴って出土しており、その他は包含層である灰褐色土中より出土した。遺構に伴う土器のうちでも半数近くは東西・南北に縦横に走る中近世の耕作用溝からのものである。

奈良時代の遺構で、比較的多量の土器を出土したものは、SE3615、SE3720、SE3755、SE3765の4基の井戸、九条条間路北側溝SD2352、坪内道路側溝SD3701、土壙SK3640などである。建物、堀の柱穴からも出土しているが、いずれも極めて少量である。

種類別にみると、土師器と須恵器がほぼ同量で圧倒的に多く、少量ではあるが製塩土器が全域から出土している。他に黒色土器、二彩、緑釉の鉛釉陶器、土馬、瓦器、弥生土器がある。以下遺構別に報告するが、土馬、墨書土器、施釉陶器、製塩土器、弥生土器については別項で記述する。

^(註6)
SD2352出土の土器(PL. 16-1, fig. 12, 13) 九条条間路北側溝SD2352からは、一つの遺構としては最も多量の土器が出土した。溝は、上・下2層に分れるが、上層出土の土器は下層のものに比して質量ともに劣る。また上層と下層の土器に接合するものもあるので、場所によっては最終段階での層位の乱れがあったと考えられる。以下の記述は下層土器を中心に行う。出土土器は、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、土馬である。

土師器(fig. 12, fig. 13-33~40) 杯A・B・C、杯B蓋、皿A・C、椀A・C・X、高杯A、盤、壺A・B・C、甕A・B・C、竈がある。

杯Aは、口径20cm前後のAⅠ(3、4)、口径17cm前後AⅡ(1、2)がある。45個体中、1群土器71%、2群土器29%で、手法の観察できるものでみると、a₀7点、a₁8点、a₃3点、b₀5点あり、a手法が量的に多い。またa手法の大半が1群土器で、b₀手法5点中4点は2群土器である。口縁外面まで削るc手法はみられない。(1)は、口径16.4cm、高3.7cm、b₀、(2)は、口径17.1cm、高3.8cm、2群、b₀、(3)は、口径19.6cm、高3.5cm、1群、a₃、(4)は、口径20.3cm、高3.4cm、1群、a₃である。内面に斜放射暗文のあるもの8点あり、うち2点は連弧暗文を伴う(3)。二段暗文のものも1点ある。

杯Bは、5個体あるがすべて2群土器である。(5)は、口径19.4cm、高5.3cm。内面口縁部はヨコナデ、底部はタテ方向のナデ、外面は口縁部、底部ともヘラケズリし、口縁はその上を密にヘラミガキを施す。c₁手法。

(註6) 器種名、器形、手法、群別等についての記述方法は、『平城宮発掘調査報告』に準じる。

杯Cは、22個体ある。手法の観察可能な12点のうち10点がb₀手法(6、7、8)、2点がa₀手法である。b₀手法のものうち4点に斜放射暗文があるが、うち2点は逆方向の斜放射暗文で、器形も一般的な杯Cとやや異なる(19、20)。(6)は、口径15.3cm、高2.4cm、(7)は、口径15.0cm、高2.6cm、(8)は、口径16.3cm、高2.8cm、(19)は、口径18.1cm、高3.7cm、(20)は、口径15.8cm、高2.6cmである。

皿Aは、22個体で、口径21~23cmのAⅠ(15、16、22)と、19cm前後のAⅡ(17、18、21)がある。手法はa₀(21、22)、b₀(15、16)、c₀(18)。(15)は、口径23.1cm、高2.6cm、1群。(16)は、口径21.3cm、高2.6cm、斜放射暗文と螺旋暗文がある。(17)は、口径18.7cm、高2.5cm、1群。(18)は、口径19.2cm、高2.5cm、2群。(21)は、口径19.0cm、高2.3cm、斜放射暗文と螺旋暗文があり、1群。(22)は、口径21.7cm、高2.1cm、斜放射暗文があり、1群。

皿Cは、7個体ある。(23)は、口径8.6cm、高1.5cm、(24)は、口径9.3cm、高2.0cmである。口縁部内外面をヨコナデし、底部は不調整のままである。

椀Aは、35個体以上ある。8割が1群土器で、図示したものは1群土器に限られる。法量でAⅠ(9、10、12、13、14)、AⅢ(11)に分れる。手法では、a₀(10、12、13)、a₃(9、11)、c₀(14)である。(9)は、口径12.1cm、高3.8cm、(10)は、口径12.0cm、高4.1cm、(11)は、口径8.3cm、高2.6cm、(12)は、口径11.6cm、高3.7cm、(13)は、口径11.1cm、高3.6cm、(14)は、口径11.0cm、高3.3cm。(13)の内面には漆が付着している。

椀Cは、13個体ある。図示したものは平底からゆるやかに内弯しながらたちあがり、口縁近くで垂直になって端部がわずかに外反する。通常の椀Cの器形とはやや異なる。(25)は、口径13.3cm、高3.2cm、(26)は、口径12.8cm、高3.5cm、(27)は、口径13.2cm、高3.8cm。^(註7)

椀X(28)は、1点だけ出土しているもので、浅い器形の椀である。平底から、前述の椀C形態のように内弯しつつたちあがるが、口縁はそのまま終る。内面と口縁外面はヨコナデで、底部外面は不調整である。a₀手法。口径13.5cm、高3.0cm。

高杯Aは、脚部2個体と杯部の破片がある。脚部のものはともにしぼりによるa手法で、(29)は、口径32.3cm、内外面ともヨコナデし、外面には粗いヘラミガキを施す。ミニチュア高杯(33)は、杯部口径8.6cm、高6.0cm。杯部内外面はヨコナデし、脚部は手づくね。

盤(30)は、底部を欠くが、外面と内面の口縁部に近いところをヘラミガキするものである。口径31.7cm。

壺Bは、3個体ある。(38)、(39)は、内面と口縁部内外面をヨコナデし、体部外面は不調整である。(38)は、口径14.8cmで、内面に漆が付着する。(39)は、口径17.3cm。把手の付く壺(40)は、口径11.8cmで、前2例と同様内面と口縁外面をヨコナデし、体部外面は不調整である。

壺Cは、壺Bを小形にした器形である。出土量は比較的多く40個体以上ある。漆の付着(註7) この器種は、通常の椀Cとやや器形を異にするため、『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984では椀Eとしている。検討すべき余地があるが、本書では従来どおり椀Cに分類しておく。

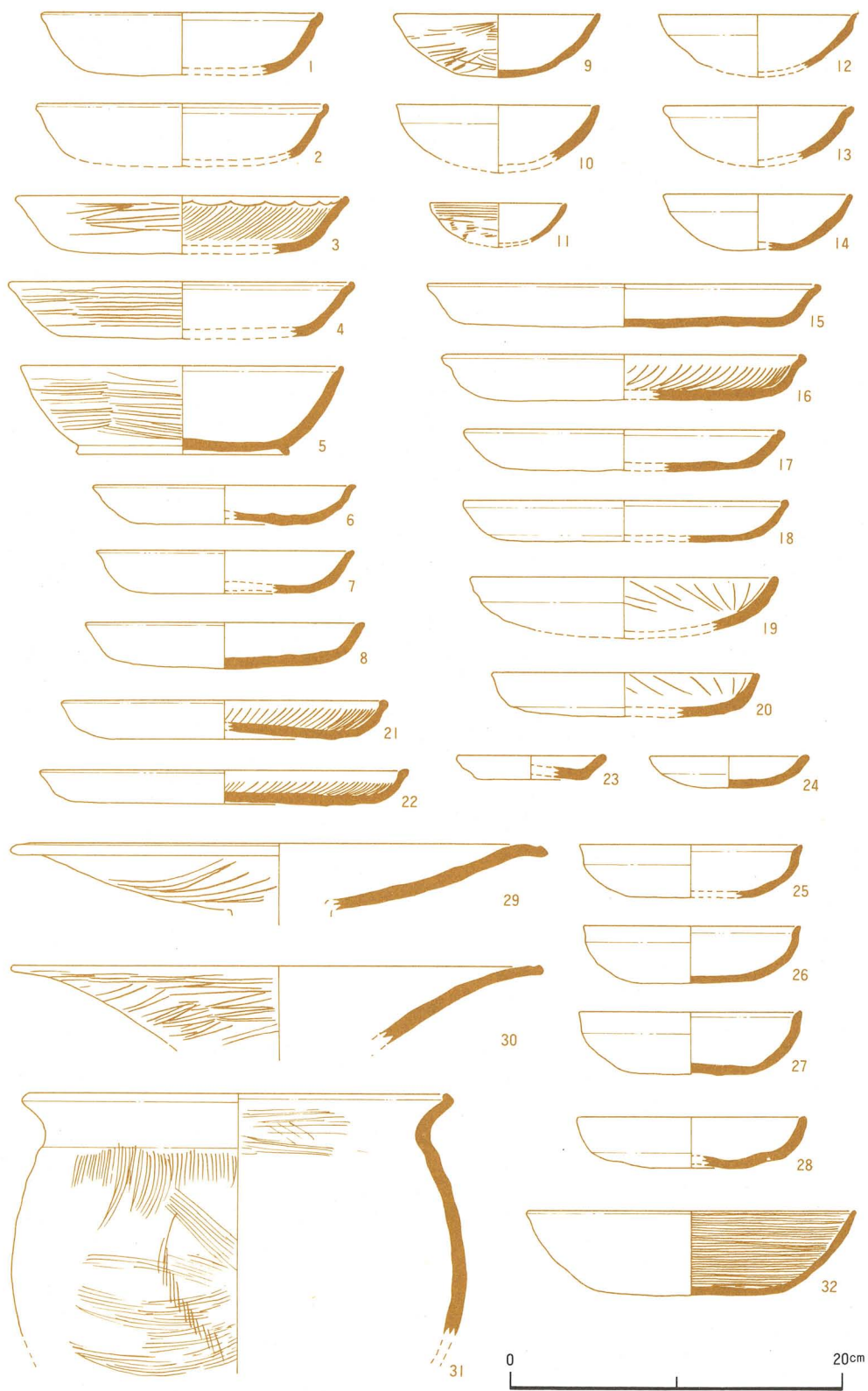


fig. 12 SD2352出土土器实测图 I

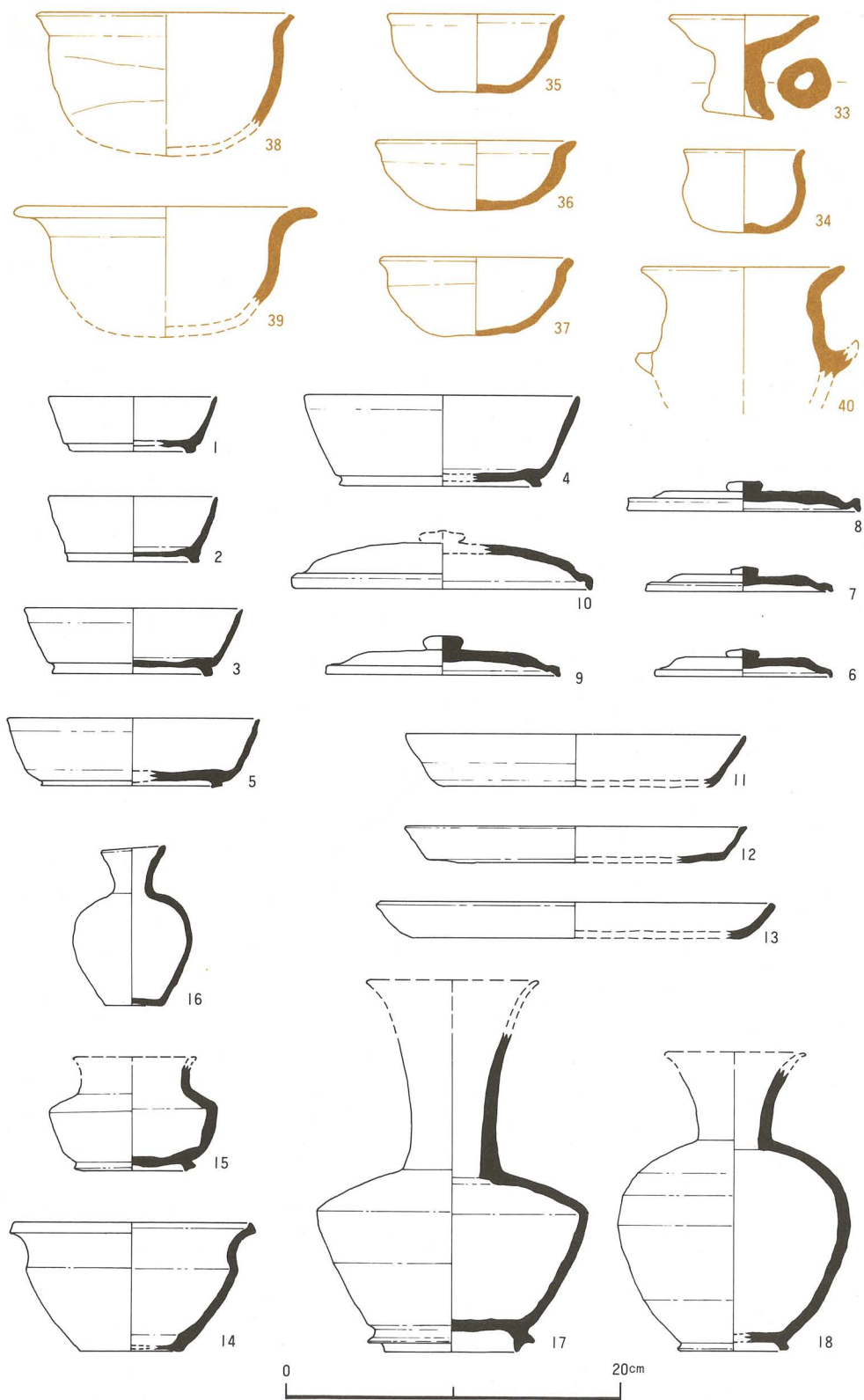


fig. 13 SD2352出土土器实测图Ⅱ

したものがある。(35)は、口径10.3cm、高4.5cm、(36)は、口径11.5cm、高4.2cm、(37)は、口径11.0cm、高4.6cm。(34)は、口径7.0cm、高5.0cmで、前3例とやや器形を異にするが、口縁部をe手法のように強くヨコナデし、体部外面が不調整で、胎土、焼成、色調ともよく似ているのでCとしておく。あるいはミニチュアか。

甕には、A・B・Cがあるが、いずれも口縁部か体部の小片である。甕A(31)は、口径25.0cmで、内面は口縁部と体部上端の5cm幅ほどをヨコ方向にハケ目を施し、体部下半はナデている。外面は、口縁部をヨコナデし、体部はタテ方向のハケ目で調整する。

その他ミニチュア竈の小片がある。

須恵器 (fig. 13) 杯A・B・同蓋、皿C、椀B、平瓶、壺G・H・K・L・M・N・X、甕A・Bがある。

杯Bは、30個体以上あり、大ききでBⅠ(4、5)、BⅡ(3)、BⅢ(1、2)に分れる。BⅠは、口縁部内外面と底部内面周囲をロクロナデし、底部内面中央部は不定方向のナデ、BⅡ・BⅢは内面全体と口縁部外面をロクロナデしている。底部外面はすべてヘラ切りののちナデている。(1)は、口径9.8cm、高3.3cm、(2)は、口径9.9cm、高3.9cm、(3)は、口径12.8cm、高3.9cm、(4)は、口径16.2cm、高5.4cm、(5)は、口径14.8cm、高4.1cmである。底部外面に墨の付着する転用硯1点と、墨書土器3点がある(fig. 23-4、5)

杯B蓋は、50個体以上あるが、縁部の形態はすべて屈曲するA形態でB形態はない。杯Bに対応してⅠ(10)、Ⅱ(8、9)、Ⅲ(6、7)の大きさがある。(6)は、口径10.4cm、高1.7cm、(7)は、口径10.9cm、高1.5cm、(8)は、口径13.7cm、高1.7cm、(9)は、口径13.8cm、高2.4cm、(10)は、口径17.5cmである。内面に墨の付着する転用硯は3点ある。

壺C(15)は、口縁部を欠損する。欠損部の形状では、やや外反ぎみに端部が終る形である。内外面ともロクロナデし、底部外面中央部はタテナデである。胎土には黒色粒が多く入り、焼成は堅緻である。残存高6.4cm。

壺H(14)は、口径14.0cm、高7.8cmをはかる小型の壺で、平底から斜め外方にたちあがる体部と大きく内湾しながら外反する口縁部からなる。内外面ともロクロナデし、底部外面に糸切り痕が残る。

壺K(17)は、底径7.8cm、残存高19.2cm。体部外面の肩より下をヘラケズリし、底部外面にタテナデを施すほかは、ロクロナデで仕上げている。

壺L(18)は、底径6.0cm、残存高16.9cm。焼成は、軟質で灰白色を呈する。口縁部内外面とも不定方向のナデを施し、体部外面はロクロヘラケズリする。口縁部近くはその上をロクロナデし、体部内面もロクロナデする。底部外面には糸切り痕が残る。

壺M(16)は、口径3.9cm、高9.4cm。口縁部内外面ともロクロナデし、体部外面はロクロヘラケズリする。底部外面には糸切り痕が残る。(PL. 18-5)

黒色土器 杯A (fig. 12-32)は、口径20.0cm、高5.1cm。A類。

S D 2352出土土器は、年代的には平城宮土器編年Ⅱ～Ⅴの土器が含まれている。

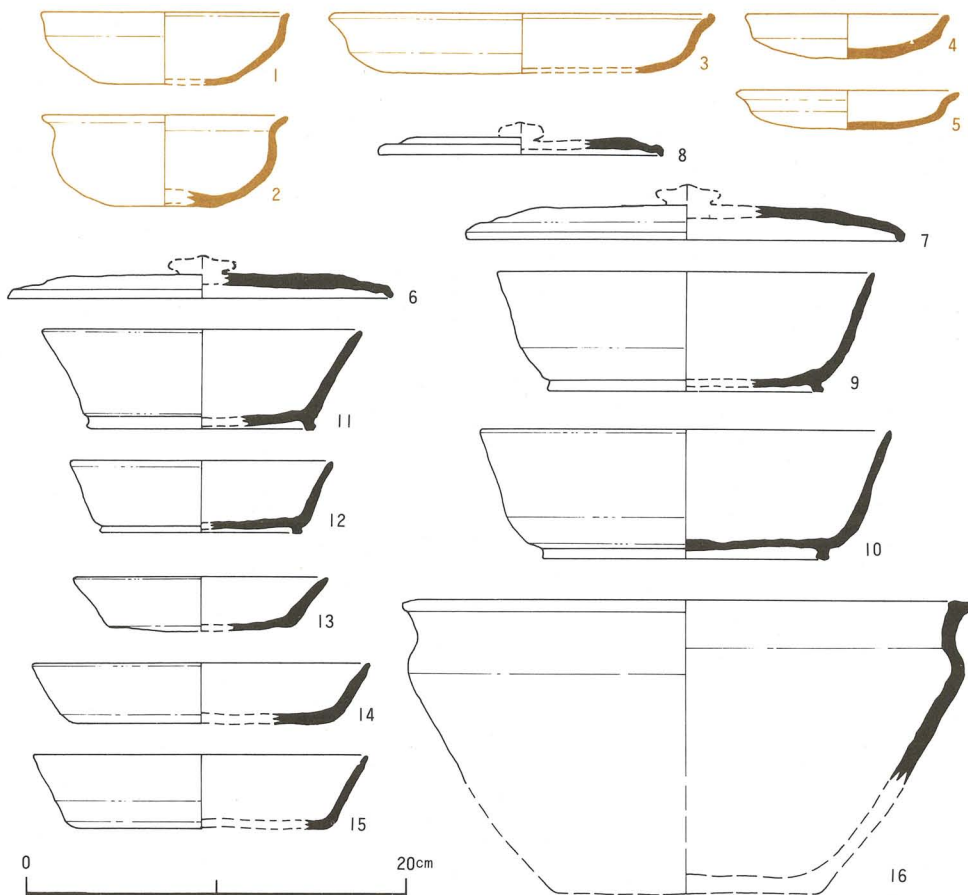


fig. 14 SD3701・3703・3706出土土器実測図

SD3701・3703・3706出土の土器 (fig. 14) 坪内区画道路の幹線側溝の出土土器を一括とりあげる。溝内にはとくに顕著な層位はなく単一層として考えている。土器類としては、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、二彩釉陶器 (fig. 22-16)、土馬がある。

土師器 杯A・B・同蓋、椀A・C、皿A・C、高杯A、壺A・C、甕A・B、竈。

皿A (3)は、口径19.7cm、高3.1cm。b₀手法、1群土器である。暗文はない。

皿Cは、口縁部が強く外反するもの(5)と、真直ぐ終わるもの(4)とある。いずれも口縁部内外面をヨコナデし、底部内面はナデ、外面は不調整である。(4)は、口径10.5cm、高2.3cm、(5)は、口径11.5cm、高1.9cm。

椀C (1)は、口径12.7cm、高3.7cmで、口縁端面はわずかに面をなす。内面はヨコナデ、外面は口縁端部のみヨコナデし、他は不調整である。1群土器。

壺Cは、7個体以上ある。(2)は、口径12.7cm、高4.7cm。壺内面に漆の付着するものがある。

須恵器 杯A・B・C、杯B蓋、鉢A・D、平瓶、壺A・同蓋、甕がある。

杯Aは、底部ヘラ切りののち、ロクロナデをするもの(13)、ロクロケズリをするもの(14)、

ヘラ切りのままのものがある。(13)は、口径13.1cm、高2.8cm、(14)は、口径17.4cm、高3.2cm。

杯Bは、18個体以上ある。(10)は、口径21.3cm、高6.8cm。高台よりもやや外方に張り出してからたちあがる器形で、口縁部内外面ともロクロナデし、底部は、内面中央部がタテナデ、外面はヘラ切り痕を残す。(9)は、口径19.5cm、高6.2cm。口縁部外面では、高台から2cm幅ぐらいまでロクロヘラケズリを施す。(11)は、口径16.5cm、高5.3cm。やや外反しながらたちあがる器形である。内外面ともロクロナデで、底部外面もヘラ切りのあとロクロナデする。(12)は、口径13.5cm、高3.8cm。底部外面もヘラ切りののちロクロナデする。

杯B蓋(6)は、口径19.8cm、頂部はロクロヘラケズリしたあとロクロナデを施している。(7)は、口径22.4cm、B形態の蓋である。胎土は緻密で焼成の極めて良好なものである。頂部全面に自然釉がかかる。(8)は、口径14.7cm。

杯C(15)は、口径17.5cm、高3.9cm。口縁内面端部に沈線がめぐる。

鉢D(16)は、口径28.1cm。接合しない底部破片からみて高台のない形である。外面は口縁部から体部下端までヨコナデ、内面は口縁部から体部上半までヨコナデしているが、下半から底部までは不定方向のナデである。焼成は軟質で灰白色を呈す。

S D3701・3703・3706出土の土器は、平城宮土器編年のⅣ～Ⅴに相当する。

SE3615出土の土器(PL. 16-2, fig. 15, 16) 掘形、埋土のそれぞれから土器類が出土しているが、図示できたのはほとんどが埋土出土のものである。種類は、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器(fig. 22-15)、土馬、製塩土器である。

土師器(fig. 15) 杯A・B・C、杯B蓋、皿A・B・C、椀A・C、高杯A、盤、壺A・C・H、鉢B、甕、ミニチュア甕、ミニチュア竈がある。

杯Aは、 b_0 手法(2、3)と c_0 手法(1)に限られる。(1)は、口径15.0cm、高3.2cm、(2)は、口径15.0cm、高3.5cm(3)は、口径14.2cm、高3.0cm。いずれも2群土器。

皿Aは a_0 手法(8、9)、 b_0 手法(10~15)、 c_0 手法(16、17、18)がある。(11)は1群土器であるが他は2群土器である。 c_0 手法の3点は、口縁端部が内側に巻き込まず、直ぐに終るものである。(8)は、口径19.5cm、高2.4cm。(9)は、口径15.3cm、高2.2cm。(10)は、口径19.5cm、高2.5cm。(11)は、口径19.1cm、高2.2cm。(12)は、口径21.5cm、高2.1cm。(13)は、口径23.5cm、高2.7cm。(14)は、口径19.7cm、高2.7cm。(15)は、口径17.3cm、高2.6cm。(16、17)はともに口径15.3cm、高2.5cm、(18)は、口径15.6cm、高2.6cm。

椀Aには、 a_3 手法(19、20、21)と c_0 手法(22)がある。 a_3 手法のものは、口縁外面端部を約1cm幅でヨコナデするほかは不調整で、ヘラミガキも粗い。(20)は、完形品で内面仕上げナデのあがり痕跡を残す。(20)、(21)、(22)は2群土器。(19)は、口径12.7cm、高3.0cm、(20)は、口径12.3cm、高3.3cm、(21)は、口径11.8cm、高3.2cm、(22)は、口径12.1cm。

皿B(24)は、口径25.2cm、高4.0cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、外面は全面ヘラミガキで、底部外面はヘラケズリする。2群土器。

皿Cは、口縁部内外面をヨコナデし、底部内面はタテナデ、外面は不調整である。(4)

は、口径9.3cm、高1.5cm。(5)は、口径9.7cm、高1.7cm。(6)は、口径10.1cm、高1.8cm。(7)は、口径9.5cm、高1.7cm。(6)は1群土器で、他は2群土器である。

鉢Bは、2種類ある。(23)は、口径16.2cm、高4.1cmを測り、口縁端部が内側に少し巻く小型の鉢である。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデで調整する。底部外面のヘラケズリは、口縁部下半まで及ぶ。2群土器。(25)は、口縁部の残りが少ない。口径27.2cm、高9.7cmの大型の鉢である。口縁外面端部と内面はヨコナデし、外面は底部から口縁部全体にヘラケズリしたのち、口縁部にはヘラミガキを施している。

壺C(26)は、口径10.9cm、高3.4cm。口縁端部外面を強くヨコナデし、他は不調整である。

甕(27)は、口縁部約4分の1の破片で、口径29.0cmを測る。内面は、口縁部をヨコ方向のハケ目、体部をナデ調整している。外面は、口縁部から体部にかけて平行状タタキ痕があり、口縁部と屈曲部はその上をヨコナデし、体部についてはナデによる磨り消しとハケ目を施している。胎土は、細砂粒を含み、焼成は堅緻で灰色を呈す。外面にはススが付着している。(28)は、口縁部から体部にかけて2分の1程度残る。口径26.8cm。内面は、口縁部がヨコ方向のハケ目、体部は不調整で指頭圧痕が残る。外面は、口縁部から体部にかけてタテ方向のハケ目を施し、口縁部はその上をヨコナデしている。

ミニチュアの甗(29)は、口径6.3cm、高3.0cmを測る。底部の穴は焼成後に穿っている。内面と口縁部外面はヨコナデするが、体部外面は不調整である。胎土には大粒の砂粒が少量入り、暗黄灰色を呈す。図示していないがミニチュア竈下端部の破片も出土している。

須恵器 (fig. 16) 杯A・B・同蓋、皿C、鉢A・D、盤A、壺G・L・M、甕Aがある。

杯Aは、口縁部内外面と底部内面の周辺をロクロナデし、底部外面はヘラケズリしている。(1)は、口径11.5cm、高3.7cm、焼成は軟質で灰白色を呈す。(2)は、口径13.2cm、高3.5cm。口縁端部と外面全体にススが付着しており、灯火器として使用されている。

杯Bは、口縁部内外面と底部内面周辺、高台周辺をロクロナデし、底部外面はヘラケズリする。(3)は、口径11.8cm、高3.4cm。(4)は、完形品で、口径11.8cm、高3.7cm。(5)は、口径13.9cm、高4.0cm。

杯B蓋は、縁部内外面ともロクロナデし、頂部はヘラ切りののちロクロナデをするが、(8)は、頂部から縁部にかけての部分にロクロヘラケズリを施している。(6)は、口径20.3cm、(7)は、口径18.2cm、(8)は、口径14.7cmを測る。(9)は完形品で、口径14.6cm、高2.7cm、内面に墨が付着し、転用硯として使用したもの。(10)は、口径13.4cm。

皿Cは、口縁部内外面と底部内面周縁はロクロナデし、底部外面はヘラ切り後ナデ調整している。焼成は、いずれも軟質で灰白色を呈す。(11)は、口径16.9cm、高1.7cm。(12)は、口径19.2cm、高1.6cm。(fig. 23-3)は、口径16.3cm、高1.7cm。裏面に墨書あり。

鉢Aは2個体ある。(13)は、口径21.0cmで、外面はヘラミガキを施す。(14)は、口径22.0cmで、内外面ともロクロナデである。

盤A(19)は、口径31.2cm、高9.0cm。体部から口縁部は、内外面ともロクロナデ、底部外

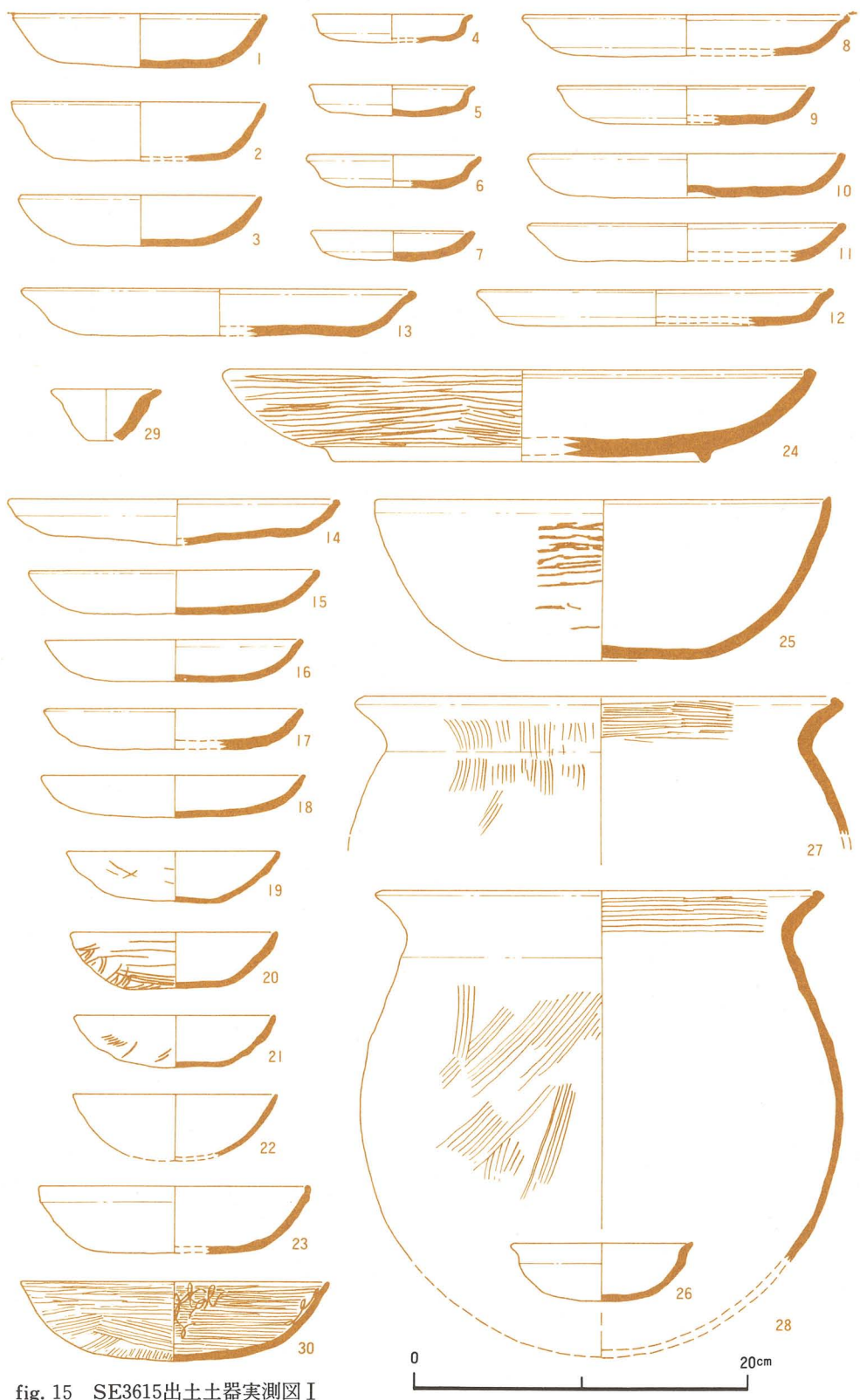


fig. 15 SE3615出土土器実測図 I

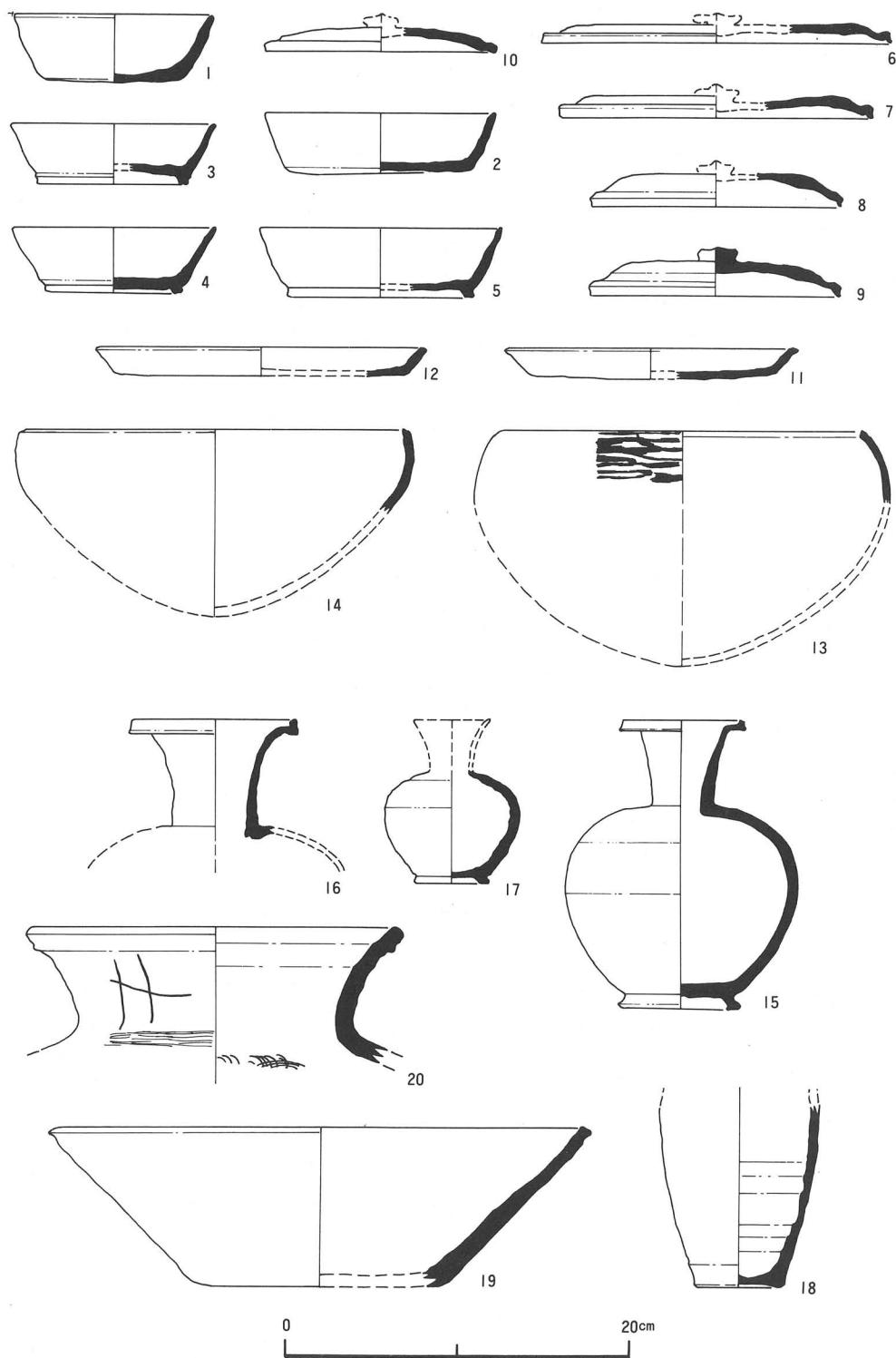


fig. 16 SE3615出土土器実測図Ⅱ

面はヘラケズリである。焼成は、軟質で灰白色を呈す。

壺G(18)は、体部のみ残る。体部内面は強いロクロ水引き痕が残り、外面はロクロナデである。底部は糸切り痕の上に植物繊維の圧痕が残る。

壺L(15)は、完形品で、口径6.7cm、高16.8cm。口頸部は内外面ともロクロナデし、体部はヘラケズリののちロクロナデする。底部はヘラ切りののちロクロナデ。焼成は堅緻で、暗灰色を呈す。(PL. 18-1) (16)は、口径9.3cm。頸部のみ残る。

壺M(17)は、底径4.2cm、現存高6.5cm。体部内面は強い水引き痕を残す。外面はロクロヘラケズリののち、ロクロナデしている。底部もロクロナデする。

甕A(20)は、口頸部のみ破片。口径21.0cm。内外面ともヨコナデし、体部外面はカキ目、内面に同心円文叩き板圧痕がある。頸部外面に「卍」印のヘラ記号あり。

黒色土器 杯A(fig. 15-30)は、口径18.3cm、高4.7cm。A類黒色土器であるが、口縁部外面端部は1cm幅ほど炭化している。内外面ともヘラミガキを密に施し、内面には不整形な螺旋暗文を施す。

SE3615出土土器は、平城宮土器編年Ⅲ～Ⅴの時期にあたる。

SE3720出土の土器(PL. 17-2, fig.17) 掘形、埋土から土器類が出土しているが、埋土中よりの出土が多い。種類は、土師器、須恵器、製塩土器である。

土師器 杯A・B、皿A・C、椀A・C、甕がある。

杯A(5)は、口径14.6cm、高2.5cm。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面から口縁下端部にかけてヘラケズリしたのち軽くナデている。1群土器。

皿C(1)は、口径8.8cm、高2.0cm。口縁部外面端部から内面全体はヨコナデするが、外面は不調整。(2)、(3)はともに口径9.8cm、高2.3cm、口縁部と内面全体をヨコナデし、底部は不調整。(2)は完形品。(4)は、口径13.1cm、高2.0cm。調整は(2)、(3)に同じ。

椀C(6)は、口径13.6cm。e手法。

甕は、口縁部のみ破片である。(7)は、口縁端部が丸く巻き込むもので、口径23.3cm。(8)は、口径24.2cm。いずれも内面は、口縁部がヨコ方向のハケ目、体部はヨコナデしている。外面は、タテ方向のハケ目を施したのち縁部についてはヨコナデをする。

須恵器 杯A・B・同蓋、皿C、盤A、壺M、甕Aがある。

杯A(11)は、口径14.8cm、高3.4cm。口縁部内外面、底部内面の中央部を除いてロクロナデ、底部外面はヘラ切りののちナデている。焼成は軟質で灰白色を呈す。

杯Bは、いずれも口縁部内外面と底部内面の中央部を除いてロクロナデ、底部外面はヘラ切りののちロクロナデと不定方向のナデで調整している。(12)は、口径15.3cm、高5.2cm、(13)は、口径17.5cm、高5.2cm。

杯B蓋は、つまみを欠く。(9)は、口径12.9cm、(10)は、口径14.5cm。(9)の頂部は、ヘラ切りののちケズリを施しており、(10)はヘラ切りののちナデている。

皿C(14)は、口径18.8cm、高2.4cm。口縁部内外面と底部内面にかけてはロクロナデ、底

部外面はナデである。

盤A(15)は、口径36.0cm。内面はヨコナデし、外面はヘラケズリののちヨコナデ。

壺M(16)は、口頸部は欠損するが、他は完形のものである。内面はロクロナデ、外面はヘラケズリののちロクロナデを施している。高台はなく、糸切痕を明瞭に残す。

S E3720出土の土器は平城宮土器編年のⅢ～Ⅴの時期のものが含まれている。

SE3755出土の土器(PL. 17-1, fig. 18, 19) 土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、土馬がある。

土師器(fig. 18-17~23, fig. 19-24~28) 杯A・B・C、皿A・C、椀A・C、高杯A、壺B・C、甕A・B・C、竈からなる。

杯B(21)は、口径23.8cm、高7.6cm。内面は磨滅のため調整は不明であるが、口縁部外面はヨコナデの上にヘラミガキを施す。底部外面は、ナデの上に井桁状のヘラミガキが残る。2群土器。

皿Aには、a₀手法(17、18、19)とc₀手法(20)がある。(17)は、口径17.6cm、高2.5cm、(18)は、口径18.4cm、高2.5cm、(19)は、口径14.6cm、高2.6cm、(20)は、口径16.2cm、高2.6cmを測る。(20)は2群土器である。

皿C(27)は、口径9.1cm、高2.0cm。底部外面は不調整で、他はヨコナデ。

椀A(24)は、口径13.8cm、高3.8cm。内面は仕上げナデの終了痕を明瞭に残し、外面は口縁部全体に指頭圧痕を残す。ヘラミガキあり。2群土器。

椀C(25)は、口径12.8cm、高4.0cm。e手法、2群土器。

壺B(26)は、口径14.1cm、高6.4cm。人面墨書土器である。小片のため墨書部分はわずしか残っていない。口縁部内外面はヨコナデし、体部内面は不定方向のナデをするが外面は不調整である。

壺C(28)は、口径10.1cm、高3.1cm。口縁部内外面を強くヨコナデし、体部外面が不調整の点は、他の壺Cと同じであるが、口縁部の屈曲が弱いので椀のような形になっている。

甕A(22)は、口径28.0cm。内面は口縁から体部にかけてヨコ方向のナデを施し、口縁外面はヨコナデである。

甕C(23)は、口径19.0cm。内面は口縁部はヨコ方向ハケ目、体部はタテに強いヘラケズリを施している。体部外面はタテ方向ハケ目、口縁部内外面はヨコナデである。

須恵器(fig. 19-1~13) 杯A・B・C、杯B蓋、皿C、高杯、鉢A、壺A・同蓋、壺B・K・L・M、水瓶、甕がある。

杯Bは、すべて口縁部内外面と底部内面の周囲をロクロナデし、底部外面はヘラ切り後ナデている。(2)は、口径17.2cm、高5.7cm、(3)は、口径19.2cm、高5.6cm、(4)は、口径14.9cm、高4.1cm、(5)は、口径10.8cm、高3.8cm。

杯B蓋(1)は、つまみがなく、口径15.7cm。頂部はヘラ切り後ナデている。

杯C(6)は、口縁部の小片。口径は、19.5cm。焼成は軟質で白灰色を呈す。

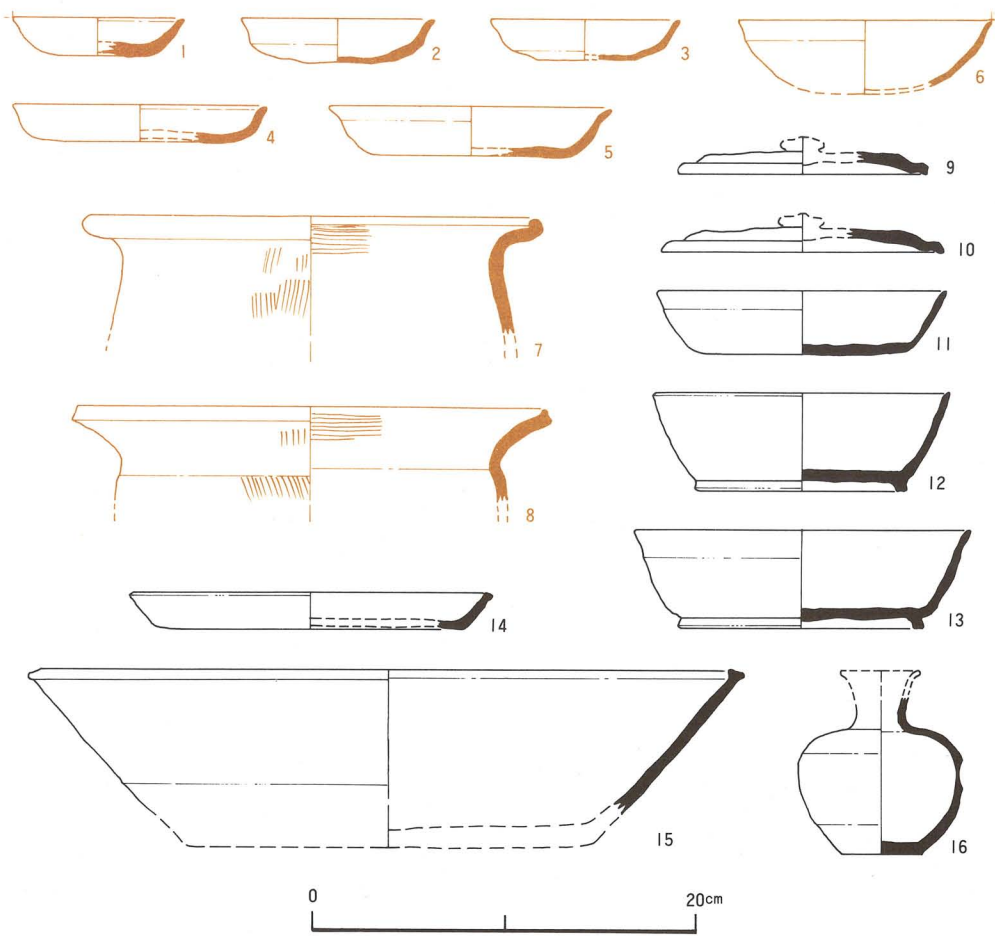


fig. 17 SE3720出土土器実測図

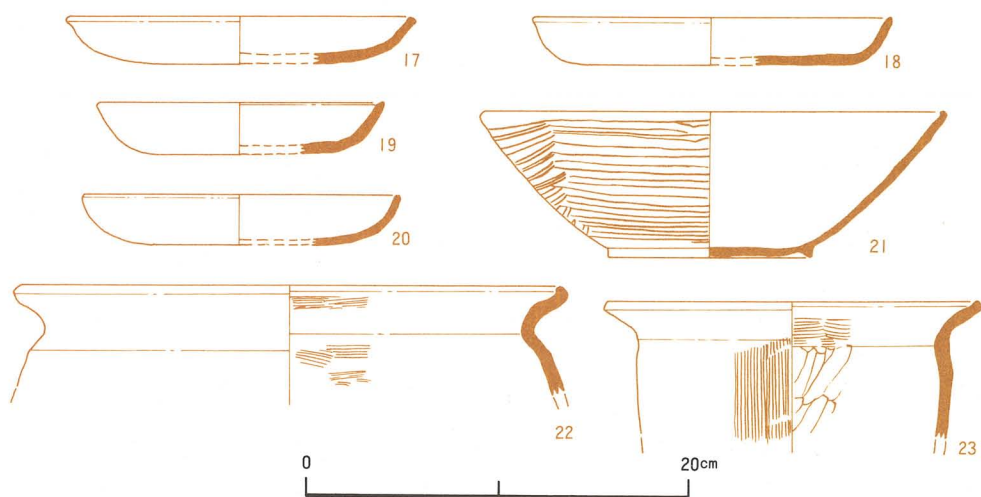


fig. 18 SE3755出土土器実測図 I



fig. 19 SE3755出土土器実測図Ⅱ

高杯(8)は、脚部の破片で、現存高12.8cm、脚中央部径4.7cmを測る。脚部は内外面ともロクロナデ、杯部中央部はタテ方向のナデである。

鉢A(13)は、口縁部の小片。復原口径20.0cm。内外面ともロクロナデし、外面はヘラミガキを加えている。

壺Lのうち、(9)は、体部中央に径2.0cmの円孔を焼成前に穿ち、臙にしている。口縁端部をわずかに欠損するほかは完形である。現存高20.0cm、底径11.9cmを測る。口頸部は内外面ともロクロナデし、体部外面はロクロヘラケズリ、底部外面はヘラ切りののちナデている。頸部内面と肩部には灰緑色の自然釉がかかる。(PL.18-2)(10)は、口頸部と肩部の破片で、(9)とは、胎土、焼成、技法、器形から自然釉のかかり具合までよく似ている。円孔の有無は不明。口径10.5cm。(11)は、体部の破片で、内面はロクロナデ、外面はロクロヘラケズリしている。底部外面はロクロヘラケズリののちロクロナデする。底径11.4cm。

壺M(12)は、口径4.8cm、高11.5cmの完形品である。口縁部内外面と、外面全体はロクロナデしている。(PL. 18-3)

水瓶(7)は、頸部のみ残存する。口径4.8cm。内外面ともロクロナデするが、外面のナデは斜に強く流れるナデで、頸部の形を整えるために把みナデしたものらしい。胎土、焼成とも極めて良好である。

黒色土器 (fig. 19-29~32) 杯A・壺X・鍋がある。

杯A(29)は、口径18.7cm、高4.9cm。A類。口縁部内外面にはヨコ方向のハケ目、底部にはヘラミガキがある。外面は、全体にヘラケズリののちヘラミガキしている。(30)は、口径19.7cm、高4.6cm。B類。内面と外面口縁端部はヨコナデののちヘラミガキ、外面口縁部から底部にかけてはヘラケズリののちミガいている。いずれも内面に不整暗文がある。

壺X(31)は、口径3.0cm、高10.6cm。B類である。体部上方に、円孔のあいた吊り手と不整形の突起が、交互に3ヶ所ずつ付いている。吊り手の1個は、孔が貫通していない。肩部および体部外面下端から高台にかけてヨコ方向のヘラミガキ、体部外面全体にはタテ方向のヘラミガキをそれぞれ密に施す。口縁部内外面と、底部外面はヨコナデ。(PL. 18-7)

鍋(32)は、口縁部の破片で体部の形状は不明だが、口径14.5cmを測る。B類である。体部外面にはススが付着している。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデを施している。

SE3755出土の土器は、図示していない破片等も含めて検討すると、平城宮土器編年のⅢ~Ⅵの時期が含まれる。

SE3765出土の土器 (PL. 17-2, fig. 20) 土師器、須恵器が出土した。

土師器 杯A・B・同蓋、皿A・C、椀A・C、高杯A、壺B・C、甕A・B・C、竈、ミニチュア竈がある。

皿A(1)は、 a_0 手法で内面に斜放射暗文と螺旋暗文がある。口径18.0cm、高2.5cm。2群。

皿C(2)は、口径11.1cm、高1.6cm。

椀C(3)は、口径11.8cm、高3.5cm。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面は不調整で

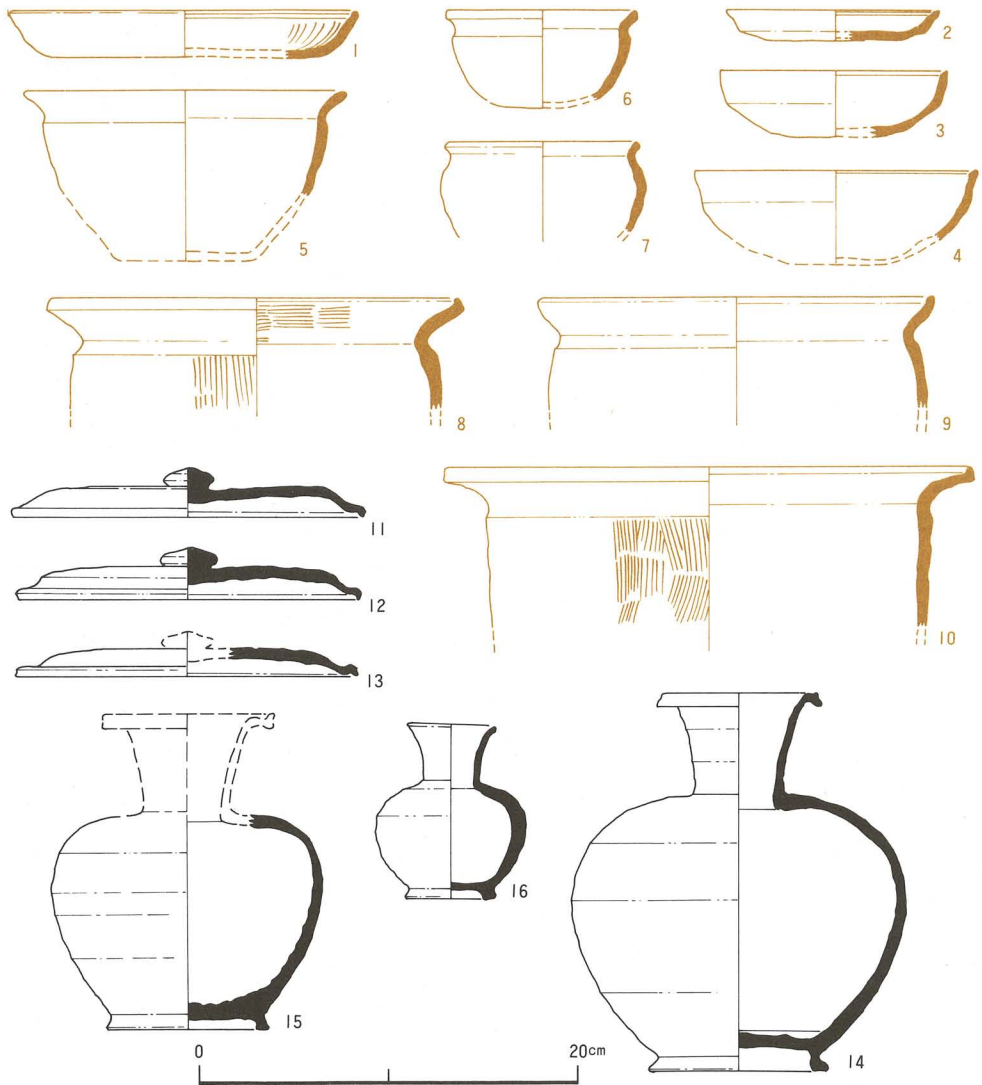


fig. 20 SE3765出土土器実測図

ある。1群土器。(4)は、口径14.7cm。(3)と同じ手法。

壺B(5)は、口径16.6cmで、体部下半は欠損する。

壺C(6)は、口径9.8cmで内面に漆が付着している。(7)も、口径9.8cm。体部内面は強いヨコナデを施している。両例とも体部外面は不調整で粘土紐の痕跡がある。

甕A(8)は、口縁部破片で、口径21.3cm。口縁部内面にヨコ方向ハケ目、体部外面にタテ方向ハケ目がある。(9)は、口径20.5cm。

甕C(10)は、口径27.5cmを測り、長胴型の甕である。内面は、口縁部も体部もヨコナデする。外面は、口縁部のみヨコナデし、体部はタテ方向のハケ目を残す。

須恵器 杯A・B・同蓋、盤A、壺K・L・M、甕A・Cがある。

杯B蓋(11)は、口径18.3cm、高2.5cm。(12)は、口径17.9cm、高2.7cm。いずれも丸みを

帯びたつまみをつけ、頂部はロクロヘラケズリしている。(13)は、口径18.0cm。

壺L(14)は、口径7.9cm、高20.0cm。ほぼ完形である。体部外面下半と底部外面とをロクロヘラケズリののちロクロナデするほかは、全体にロクロナデである。(15)は、体部の3分の1と頸部を欠く。底径8.4cm。内面はロクロナデし、外面はロクロヘラケズリののちロクロナデしている。底部外面もロクロナデである。

壺M(16)は、口径4.4cm、高9.2cm。ほぼ完形品である。口頸部内外面はロクロナデ、体部はロクロヘラケズリののちロクロナデ。底部外面に糸切痕がわずかに残る。(PL. 18-4)

SE3765の出土土器には、暗文のある皿A(1)があるが、小片でわずかに1点である。掘形・埋土出土の他の土器全体の特徴からは、平城宮土器編年のⅣ～Ⅴと考えられる。

SK3640出土の土器(PL. 17-3, fig. 21, 22) 土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、土馬がある。

土師器(fig. 21) 杯A・B・C、杯B蓋、皿A・C、椀A・C、高杯A、盤B、壺B、甕。

杯A(1)は、口径16.7cm、高4.5cm。c₀手法であるが、ヘラケズリは、口縁部外面端部までは及んでいない。

杯Cは、すべてa₀手法。(2)は、口径16.8cm、高2.6cm。(3)は、口径16.6cm、高2.7cm。(4)は、口径17.5cm、高2.6cmで、2群土器である。

皿Aは、a₀手法(5、6)、b₀手法(7)、c₀手法(8~12)がある。(5)は、口径15.3cm、高2.5cm、(6)は、口径22.3cm、高2.0cm、(7)は、口径22.6cm、高3.1cm、(8)は、口径17.0cm、高3.0cm、(9)は、口径16.7cm、高3.5cm、(10)は、口径18.8cm、高3.7cm、(11)は、口径20.6cm、高3.3cm、(12)は、口径20.3cm、高3.0cm。すべて2群土器。

皿Cは、すべてa₀手法。(15)は、口径10.7cm、高2.6cm、(16)は口径10.4cm、高1.8cm、(17)は、口径11.3cm、高2.4cm、(18)は、口径11.4cm、高2.4cmである。(15)、(18)は口縁部にスス附着し、灯火器として使用。

椀Aには、a₀手法(19)、a₃手法(20、21)、c₀手法(22、23)がある。(19)は、口径12.0cm、高4.8cm、(20)は、口径11.3cm、高3.6cm、(21)は、口径12.0cm、高4.4cm、(22)は、口径12.0cm、高4.3cm、(23)は口径12.0cm、高3.9cm。すべて2群土器。

椀C(24)は、口径12.6cm、高4.5cm。C手法。口縁端部はやや外反する。2群土器。

盤B(13)は、口径25.3cm、高6.4cm。内面はヨコナデ、口縁部外面はヘラミガキ。2群。

壺Cは、口縁部の形態で2タイプある。(25)、(26)は、端部をやや大きく開くもので、(27)は、短く終る。(27)は体部も丸みを帯びた器形である。

甕Aの4個体は、基本的には口縁部内面をヨコ方向のハケ目、外面はタテ方向のハケ目を施すが、口縁部はその上をヨコナデしている。体部内面は、(fig. 22-32)がタテ方向の粗いヘラケズリを施すほかは、ナデで調整している。(28)は、口径27.5cm、(29)は、口径31.0cm、(30)は、口径34.3cm、(fig. 22-32)は口径21.6cmを測る。

甕B(fig. 22-31)は、口径25.7cm、現存高12.8cmを測る。口縁部内面はヨコ方向、体部

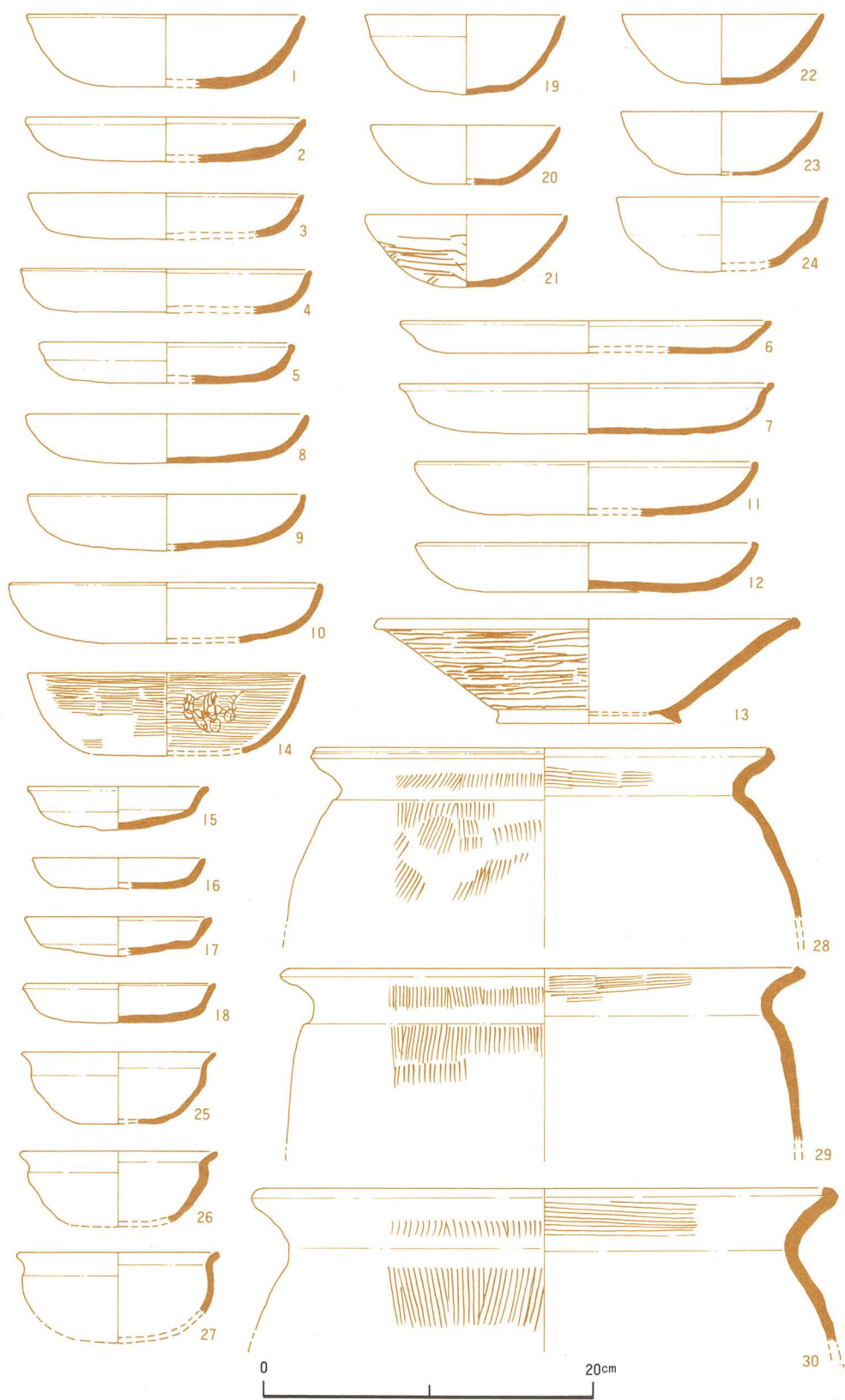


fig. 21 SK3640出土土器実測図 I

外面はタテ方向のハケ目を残すが、ハケ目は細かく、強く明瞭につけられている。体部内面にもタテ方向のハケ目があるが、上半部はナデ、下半部はヘラケズリで消されて不明瞭である。把手は小さく上方に曲る。

須恵器 (fig. 22-1~13) 杯A・B・同蓋、皿C、平瓶、鉢D。壺A・同蓋、壺G・L・M・H、甕がある。

杯A(8)は、口径15.4cm、高3.3cm。底部外面はヘラ切り後ナデ。焼成は軟質で灰白色。

杯Bは、底部内面中央部を不定方向のナデ、外面はヘラ切り後ナデている。(9)は、口径16.8cm、高5.4cm、(10)は、口径12.9cm、高3.8cm、(11)は、口径10.5cm、高3.4cm。

杯B蓋は、すべてA形態である。頂部をヘラ切りのちロクロヘラケズリするもの(1、2)と、ロクロナデするもの(3~7)がある。(1)は、口径18.0cm、高1.8cm、(2)は、口径15.1cm、高1.8cm、(3)は、口径14.7cm、高2.0cm、(4)は、口径11.1cm、高1.3cm、(5)は、口径11.2cm、高1.3cm、(6)は、口径9.9cm、高1.7cm、(7)は、口径10.5cm、高1.5cm。

壺A蓋(13)は、つまみを欠く。口径16.5cm、現存高2.7cm。端部内外面はロクロナデ、内面は不定方向のナデ、頂部外面はヘラ切り後ナデている。

壺H(12)は、口径12.3cm。内外面ともロクロナデ。焼成は軟質で灰白色を呈す。

黒色土器 杯A (fig. 21-14)は、口径16.8cm、高5.0cm。内外面ともヘラミガキ。花卉状の暗文がある。A類黒色土器。

S K3640は、年代的には、平城宮土器編年のVの時期のものが一括投棄されたものと考えられる。

施釉陶器 (巻首図版、PL. 18-6、fig. 22) 施釉陶器は、3個体出土した。緑釉碗(14)は、口縁部の破片であるが器形からすると高台付の碗であろう。緑釉は淡黄緑色である。口径21.6cm。緑釉壺(15)は、S E3615埋土上層部から出土した完形品である。体部内面と、口縁部内外面から肩部にかけてはロクロナデ、体部外面はヘラケズリしている。素地の焼成は軟質で、深緑色の釉が、口縁部内面、外面全体と底部外面にもかかっている。口径3.6cm、高4.4cm。二彩壺(16)は、S D3701出土で、釉はわずかに残るだけである。辛うじて白釉と緑釉の二色が確認できるが、平城京の他の出土例からみて三彩釉である可能性も否定できない。内面底部のみタテナデし、他はロクロナデしている。素地は焼成が軟質で白色を呈す。口径3.5cm、高3.9cm。

土馬 (fig. 22-17、18) S D2352・3701、S E3615、3755、3765、S K3640などから20個体以上が出土している。図示した2例は脚部を欠損する。尾は上方に上がり、たてがみなどの表現もない。しかし(17)については、わずかにナデによる鞍の表現がみられる。

墨書土器 (PL.19、fig. 23) 溝、井戸、包含層などから少量の墨書土器が出土している。fig. 23のものは、すべて須恵器に書かれたものである。(1)は、S K3640出土で、杯B蓋頂部に逆字で「右」とある。(2)S E3755出土。同じく杯B蓋の内面に明瞭に「奥内」と記している。人名かどうかは不明である。(3)は、S E3615出土。皿Cの底部外面の周辺近

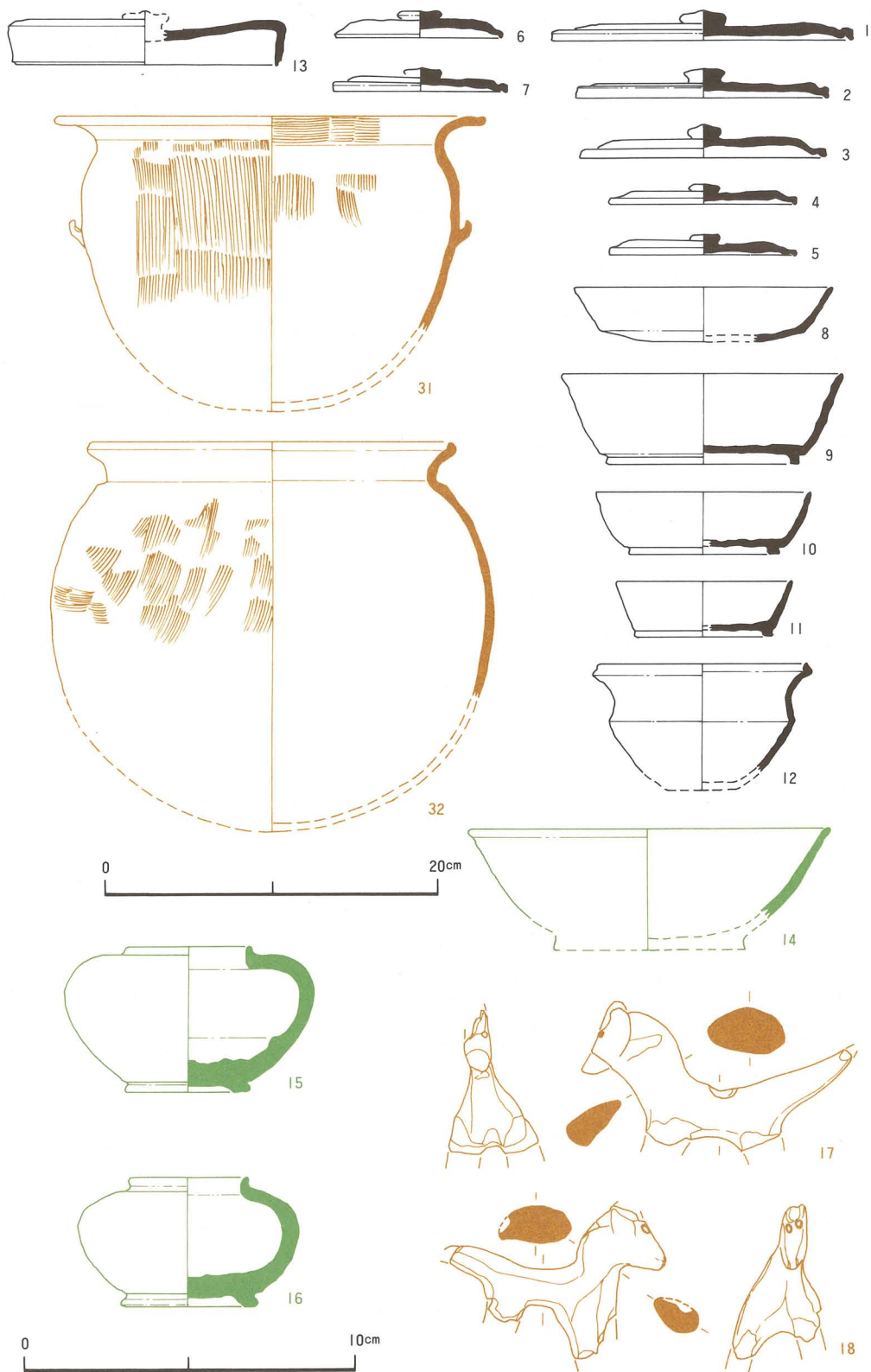


fig. 22 SK3640出土土器Ⅱ・施釉陶器・土馬実測図

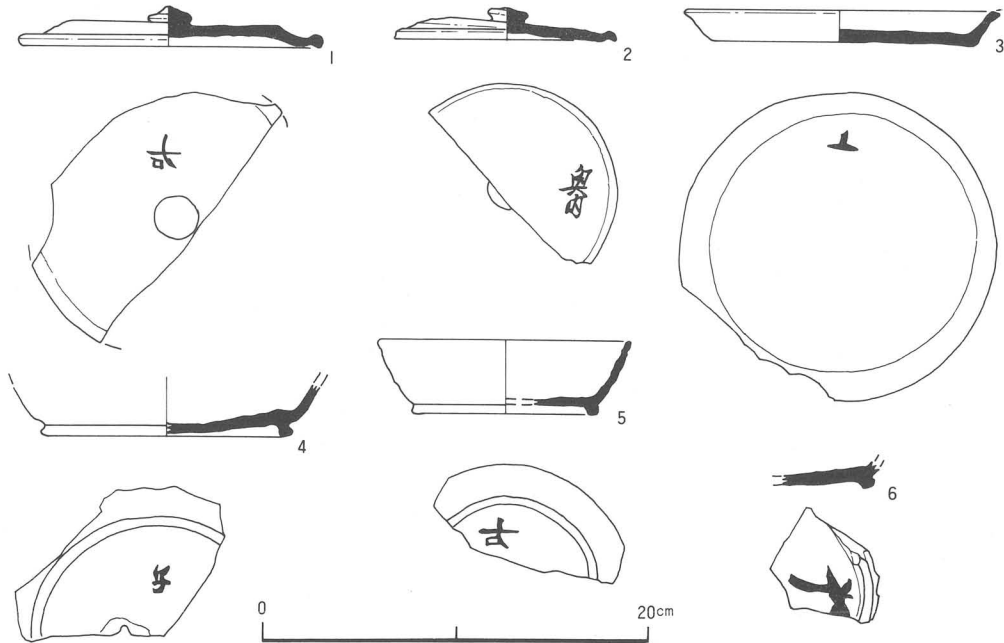


fig. 23 墨書土器実測図

くに「T」字形の墨書のあるものである。記号であろうか。(4)は、S D 2352出土、杯B底部外面に書かれていて、「子」と読める。(5)も同じくS D 2352出土のもので、杯B底部外面に逆字で「右」と書かれている。(6)はS E 3755出土で、杯B底部外面に「大」の字状に書かれるが、文字ではなく記号であろう。同じ形のものが、他にも1点ある。

その他、杯B底に「白」か「自」と読めるもの(P L 19-6)、土師器杯底に「井」と読めるもの(P L 19-8)がある。

製塩土器 製塩土器は、調査区全域の遺構・包含層から少量ずつ出土している。いずれも小片で遺存状況が悪く、全体の形を復原できるものはない。胎土、手法に限って分類すると、Ⅰ. 内外面ナデ調整のもの、Ⅱ. 内面に布圧痕のあるもの、Ⅲ. 胎土にもみ穀の入るもの、が抽出できる。Ⅰの中にも極めて薄手で、胎土に少量の大粒砂粒が入る粘性の強いものと、厚手で砂粒の多いものがある。Ⅱの布圧痕も、極めて細かい布圧痕と、荒いものがある。Ⅲは極めて少ない。

弥生土器(fig. 24) 高杯(1)は、S D 3701から出土したもので、杯部から脚部上端にかけての破片である。杯部は深く、口縁外面に縦の凸帯が7本一単位で貼りつけられている。位置からみて4ヶ所に配されているものとみられる。口縁の外面と内面全体はナデ調整、底部外面は細かいハケ目がある。脚部は磨滅が激しく調整は不明である。口径29.0cm、高14.3cm以上を測る。胎土には砂粒を多少含み、部分的に赤味を帯びた暗褐色を呈す。弥生中期。

甕(2)は、S K 3717から出土したもので、平底と短く外反する口縁をもつ器形で、復原すると完形近くなる。口縁部内面はヨコ方向のハケ目、外面は体部全体にタテ方向のハケ目を施している。ハケ目は上半が荒く、下半が細かく原体を異にする。体部内面はナデ調整である。胎土は砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈す。口径28.4cm、高42.0cm。弥生中期。

小結 後述する遺構の変遷とも関連するので、まず出土土器全体の年代観について触れておく。土壙S K 3640出土土器が、平城宮土器編年Ⅴ期(奈良末)のものに殆んど限られているため奈良末の時期の一括投棄と考えられるほかは、井戸・溝などのものについては、各時期のものを含んでいる。

九条条間路北側溝であるSD2352では、土師器杯Aに2段放射暗文をもつものなど、平城宮土器編年Ⅰ～Ⅱに属するものがある。掘立柱東西棟S B 3739の柱穴から出土した須恵器杯Bは、高台から口縁部へのたちあがりの形状からみて、平城宮土器編年のⅡ期以前に考えられる。杯B蓋も、口縁部の屈曲しないB形態で、頂部をヘラケズリしており、同様の時期である(fig. 25)。S B 3739は重複関係から最も古い時期に編年される建物であり、建物変遷を考える上での手懸りとなる。

ほかに、16棟の建物、12条の堀の柱穴から土器が出土しているが、出土量もさほど多くなく、年代の決め手となる良好な資料もなかった。



fig. 24 弥生土器実測図

4 基の井戸からの出土土器では、平城宮土器編年のⅡ期に遡るものはない。S E 3720には、図示していないが、Ⅲ期頃とみられる土師器杯Aの破片等が含まれている。S E 3615、S E 3755も同様の時期とみてよいが、S E 3765はやや時期が下る。廃絶時期については、各井戸とも埋土中に奈良末から長岡宮の時期のものが含まれているので、長岡宮遷都に伴ってか、あるいはまもなくの時期と考えられる。

九条条間路北側溝S D 2352は、上層出土土器中に、東三坊大路東側溝SD650の上層に対応する土師器杯Aが数点あることと、同溝上を覆っている土壙S K 3618中にも同時期の土師器杯Aがあるので、9世紀後半に最終的に廃絶したようである。この点については、東市推定地での東堀河の廃絶時が、出土土器から同じように考えられていることとも符合する。

出土土器の器種構成などの内容についてみると、^(註9) 単一の遺構で個体数を問題にできるほどの量がな

いため、土師器と須恵器の数量比、食器類、貯蔵器、煮沸器相互の数量比などを数値で示して比較することはむずかしい。

しかし出土総量の単純な比較という点では、土師器と須恵器に著しい数量差は認められない。平城宮内での土師器と須恵器の数量比では、土師器が圧倒的に多いのに

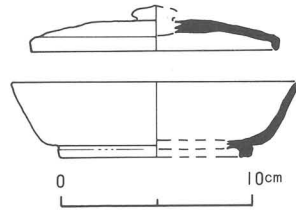


fig. 25 SB3739柱穴出土土器実測図

対して、京では、一般に土師器と須恵器の数量が近似していることが指摘されている。この点では、今回の場合は、京の一般的な傾向を認めることができる。^(註10)

平城京左京四条四坊九坪では、土師器と須恵器の数量比以外に、宮の土器と京の土器との相違点を次のような器種構成の相違にもとめている。その1つは、土師器食器類に口径15cm以下の小形器(杯AⅢ・碗C・皿C)が少なく、逆にまた土師器・須恵器とも高5cm以上の大形品も少ないこと、その2は、須恵器杯L、糸切底杯Bのような宮にはみられない器種が存在すること、である。今調査区出土土器が、主に奈良時代後半の土器であることと、一括資料でない点で直接の比較は困難であるが、第1の指摘のうち、土師器杯AⅢ、碗Cが極めて少ない点では同様の傾向は認められる。但し、皿Cについては、灯火器に使用している例も多いので、これを食器に含めるかどうか問題はありますが、今回の場合は極端に少ないということはない。

むしろ、今調査区出土土器を全体的にみた場合の宮との相違は、I群土器が極端に少ないことである。奈良時代後半にI群土器が減少傾向にあることは宮でもみられるが、今調査地ではほとんどII群土器に限られている点が注目される。いずれにしても、今後良好な一括資料によって宮と京、あるいは京の中での相違等、細かく検討していく必要があろう。

(註8) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ 1975

(註9) 註3に同じ

(註10) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983

2. 瓦

今回の調査で出土した瓦は、軒丸瓦が2点、丸・平瓦が整理平箱で8箱と量が少ない。軒丸瓦はともに外区を残す小片で、1点が珠文・線鋸歯文縁、他が6133型式と推定される珠文縁である。前者はII区中央部、後者はI区で出土。丸・平瓦はI区の井戸S E 3615、九条条間路北側溝S D 2352及びII区の坪内道路S F 3705付近からややまとまって出土した。丸瓦はいずれも玉縁丸瓦で、平瓦には一枚作りのほか桶巻き作りによるものが若干ある。

3 木製品(PL. 20、21、fig. 26~28)

木製品は、S D 2352・S E 3615・S E 3720・S E 3755・S E 3765より合わせて約50点が出土した。種類は祭祀具・服飾具・食膳具・文房具・農具・容器・その他部材が34点あり、他は用途不明の板状品・棒状品である。

祭祀具 斎串が3点ある(2~4)。細長い薄板ないし棒の一端を尖らせ、側面に切込みをほどこした串状品。3・4は薄板の上端を圭頭状に、下端を剣先状に作り、左右両側面から切込みを入れる。ともに表・裏面を剖面のままとし、側面のみに削りをおこなう。3は切込みが側面の左右2箇所があり、上方の切込みを下向きに、下方の切込みを上向きに入れ、1箇所の切込み回数は8~10回。長19.8cm、現存幅1.6cm、厚0.15cm、ヒノキ板目材、S E 3755出土。4は側面を割裂くように上端木口から切込みを入れ、1箇所の切込み回数は2回である。長16cm、幅2cm、厚0.2cm、ヒノキ板目材、S E 3755出土。2は角棒の側面に切込みを入れるもので、類例の少ない形態。割材の四面を削り角棒に加工し、頭部を4方向から斜めに削り角錐状とする。他端の形状は欠失のため不明である。4側面のそれぞれに2箇所以上の切込みを入れ、切込みの位置を上から順に、左右→前後→左右→前後、切込みを入れる方向を上から順に、下向き→上向き→下向き→上向き、と変化させている。1箇所の切込み回数は8~9回。現存長31.6cm、径0.9×0.8cm、ヒノキ、S E 3755出土。

服飾具 櫛が5点ある(6~10)。いわゆる挽齒の横櫛で、板の一側縁から細い齒を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげる。平面形はいずれも長方形。肩部の形状は、7~10では丸味を帯び、6は欠失のため不明である。脊の上縁はいずれもゆるい弧を描き、その断面形は6が半円形、7が隅丸方形、8~10が圭頭形を呈する。齒の挽き通し線は、6~9では脊の上縁に平行してゆるい曲線を描き、10では直線に引いている。齒は両面から交互に鋸で挽き、先端を両面から削って尖らず。齒の数は3cmあたりで、6が32枚、7が27枚、8が29枚、9が30枚、10が28枚。6：現存長2.9cm、脊高0.5cm、齒長2.1cm、厚0.4cm、イスノキ、S E 3615出土。7：現存長5.5cm、脊高0.6cm、齒長3.25cm、厚0.4cm、イスノキ、S E 3755出土。8：現存長5.4cm、脊高0.85cm、齒長3.2cm、厚0.8cm、イスノキ、S E 3615出土。9：現存長7.8cm、脊高0.9cm、齒長3.35cm、厚0.8cm、イスノキ、S E 3615出土。10：長14.6cm、脊高1.65cm、齒長3.55cm、厚0.9cm、イスノキ、S E 3615出土。

食膳具 杓子形木器が1点ある(5)。幅広い板目板の一端を身とし、頸部から次第に幅を狭めて柄を作るが、柄頭を欠失する。身の先端を半円形に作り、身の側縁から頸部への移行部は稜を落とし撫で肩とする。両面とも平坦で表裏の区別がない。身の先端を片面から少し削り薄めるが刃を付けてはおらず、断面形は丸味をもつ。身・頸部・柄ともに側縁の稜を落とし丸く仕上げる。現存長21.9cm、幅9.4cm、厚0.75cm、ヒノキ、S E 3755出土。

文房具 物指の断片が6片ある(1)。扁平な薄板に刻線で目盛りをつけたもの。6片は同一個体の可能性があるが互いに繋がらず、5片は両端を欠失し、1片にのみ一端面が残る。

3片を図示。表裏面・側面・端面ともに削って平滑に仕上げる。表面に1寸ごとの目盛りを入れ、その刻線は全幅を横断し一部で側面にも及ぶ箇所がある。1箇所だけ5分目盛りがあり、その刻線は全幅を横断せず2分の1の所で止まる。5寸をあらわす目盛りには「X」印を刻んでいる。「X」印を刻む破片が3点あるので、1尺の物指とすれば3本あったことになる。裏面にも目盛りを入れるが、間隔が5分・1寸・1寸5分・2寸5分と一定しない。表面の1寸刻み目盛りの間隔は2.925cm～3.025cmのばらつきがある(平均2.983cm)。現存長21.7cm・9.3cm・6.65cm・6.5cm・5.7cm・2.2cm、幅1.05cm・1.15cm・1.1cm・1.1cm・1.15cm・現存幅0.75cm、厚0.3cm。ウツギ柀目板。S E 3615出土

農具 鍬の身が1点ある(19)。板目の割板を削って作る。平面形は舌状をなし、頭部を山形とする。肩部下5.1cmの所に段があり、それ以下を鉄鍬先との着装部とする。鍬先への挿入部は両面から斜めに削られて尖る。前・後面ともに中央部を厚く、周縁に向ってやや薄く整える。身の上半部には、平面長方形の柄穴が後面に対し65°の着柄角度であけられるが、柄は遺存しない。前面の柄穴から先端にかけては、柄穴幅で低い突帯を削り出す。前面の柄穴の外側には柄があたった痕跡があり周囲より低く窪む。現存長32.7cm、幅20cm、厚1.9cm、柄孔5.1×3.6cm、アカガシ垂属、S E 3755出土。

容器 円形曲物の底板が11点、側板が2点、箍が1点、側板・箍が残るもの1点、側板・箍・底板が残るもの2点がある。底板(12～15)はいずれも周縁を鋭利な刃物で垂直に裁ち落とし、側面に側板固定用の木釘穴がある。木釘が残る例があり、12は5孔中1孔、13は4孔中2孔、14は7孔中5孔、15は6孔中1孔が残る。12・14・15の上面には黒漆が付着する。16は大型品でS E 3720の水溜に転用していたため底板はない。側板下端には底板を固定するための木釘留めの跡が17箇所ある。上下縁に箍をはめるが、上箍のみが残る。側板は重ね部分の1箇所で樺皮縫いをし、内面に縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。上箍は重ね部分の2箇所で樺皮縫いし、側板とは2箇所で樺皮縫いで固定している。下箍は3箇所側板に木釘留めする。側板の上端部には相対する1箇所に幅6cm、深さ4cmのえぐり込みがある。内面全体に黒漆が付着する。17は側板に底板を10箇所木釘留めし、下縁に箍をはめる。側板は重ね部分の1箇所樺皮縫いをし、内面に縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。下箍は重ね部分の2箇所樺皮縫いをし、8箇所以上で側板に木釘留めする。18は側板に底板を6箇所木釘留めし、下縁に箍をはめる。側板は重ね部分の1箇所樺皮縫いし、内面に縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。箍は重ね部分の1箇所樺皮縫いし、6箇所側板に木釘留めする。内面全体に黒漆が付着する。12：径20.5cm、厚0.9cm、ヒノキ板目材、S E 3720出土。13：径20cm、現存厚0.8cm、ヒノキ板目材、S E 3765出土。14：径22cm、厚0.8cm、ヒノキ板目材、S E 3720出土。15：径19.4cm、厚0.8cm、ヒノキ板目材、S E 3720出土。16：径44.8cm、高30.3cm。17：復原径23.4cm、現存高4.9cm、S E 3720出土。18：径26.1cm、高10.8cm、S E 3615出土。

部材(11) 片胴付ないし二方胴付の柄を造り出した部材。現存長16.8cm。S E 3765出土。

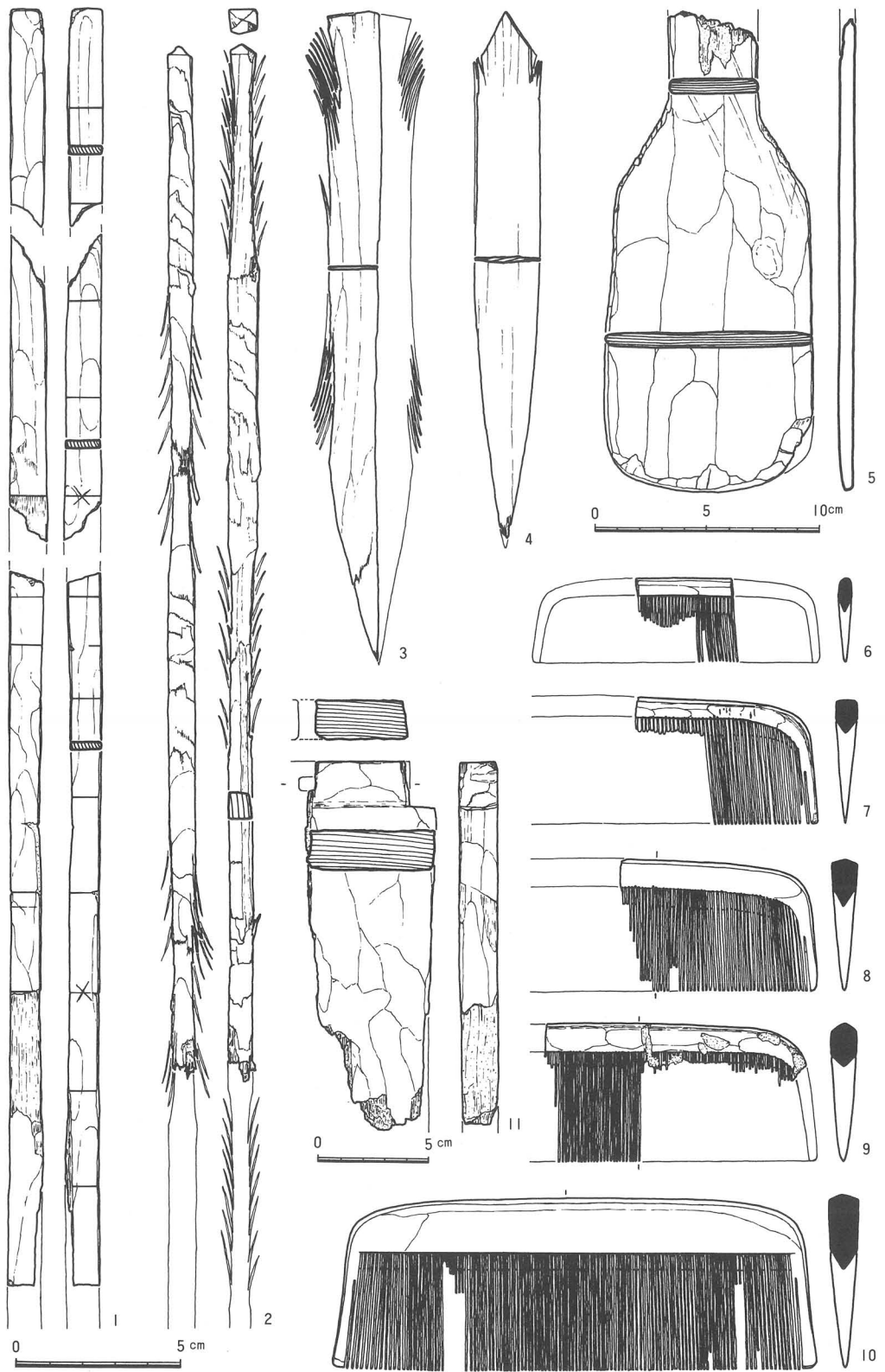


fig. 26 出土木製品実測図 I

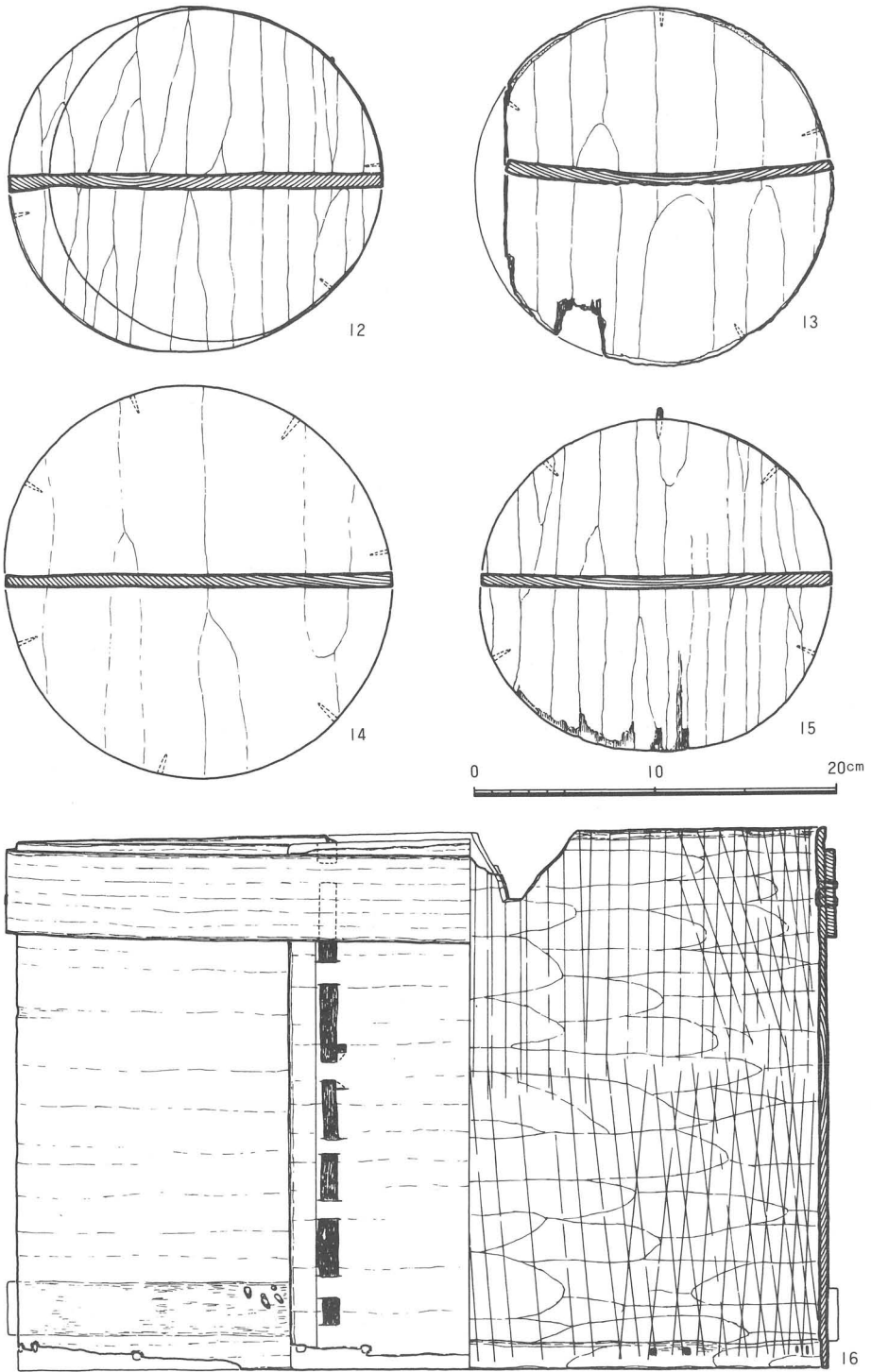


fig. 27 出土木製品実測図Ⅱ

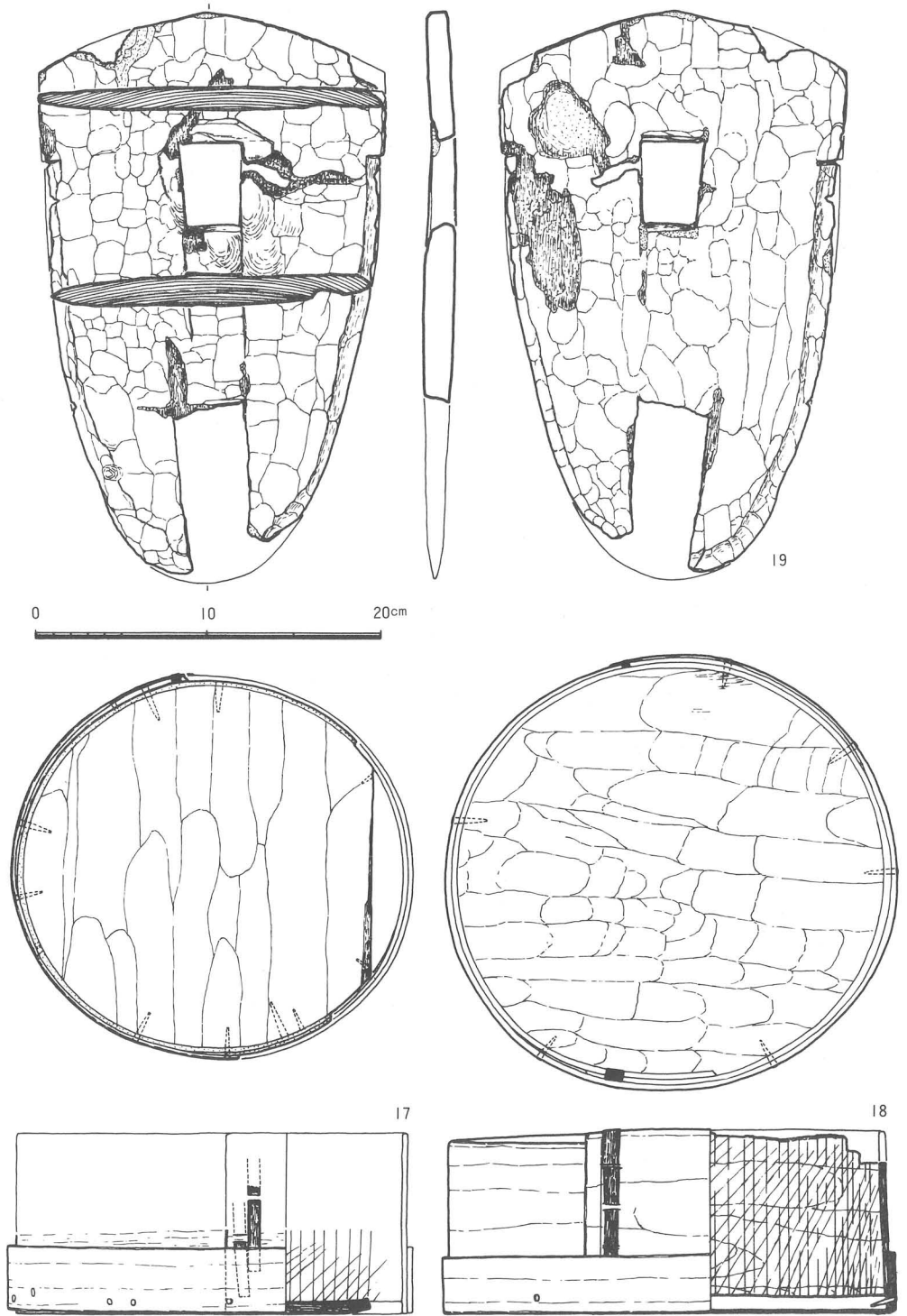
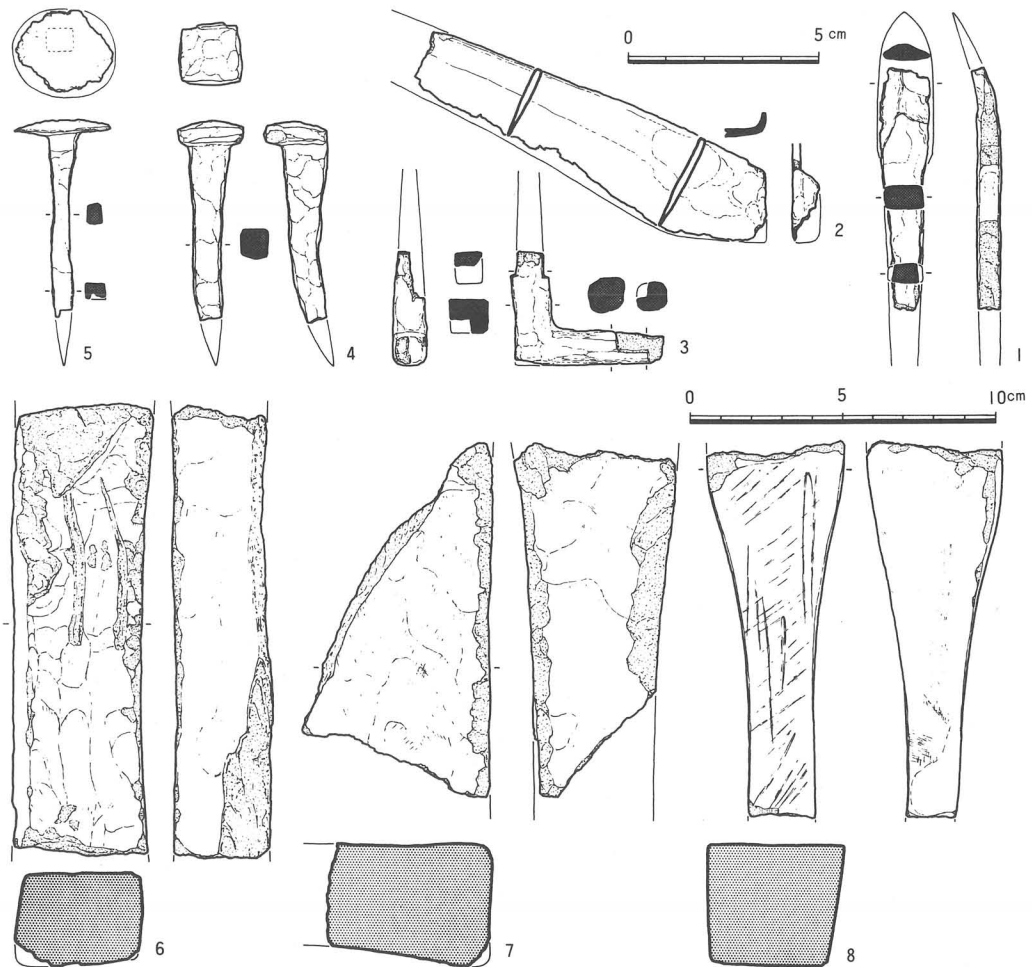


fig. 28 出土木製品実測図Ⅲ

4 金属製品・石製品 (PL. 22, fig. 29)

鉄製品(1~5) 1は鉋で刃部の先端と茎の大半を欠失する。刃部は甲中央に鑄をもち両刃で、鉋特有の反りをもつ。現存長6.4cm、現存刃幅1.3cm、小溝出土。2は鎌で刃部を大きく欠失する。基端部に着柄のための折返しをもつ。現存長9.8cm、小溝出土。3は肘金具で、円環状の壺金具と組合せて櫃などの蓋と身を連繫するもの。脚と基部は断面正方形で、腕部は断面円形である。腕部長3.8cm、同径0.9cm、小溝出土。4は方頭釘。現存長5.2cm、小溝出土。5は円頭釘、現存長5.2cm、S E 3615出土。**銅銭**(9~12) 9は和同開珎で隸開の和同開珎A。鑄上がりりが良く銭文は鮮明。重量2.42g、径2.46cm、S E 3615出土。10~12は神功開寶。10は隸開で「功」が大きい神功開寶A、11は隸開で「刀」の第2画が長い神功開寶E、12は細分型式不明である。10：重量4.13g、径2.61cm、S D 2352出土。11：径2.48cm、S E 3615出土。12：S D 2352出土。**砥石**(6~8)はいずれも断面方形で表裏側面を使用している。6：現存長14.6cm、砂岩、S E 3755出土。7：現存長11.5cm、砂岩、小溝出土。8：現存長12.2cm、砂岩、包含層出土。



42 fig. 29 出土金属製品実測図